

12月2日 待降節第1主日

エシ 33:14～16 Iテサ 3:12～4:2 ルカ 21:25～36

1. ルカ

vv.27-28 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

vv.35-36 「その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

「聖なる教会は、一年を通して、一定の日に、キリストの救いのわざを想起して、これを祝う」と、カトリック教会の“典礼暦年と典礼暦に関する一般原則”は書き始めています。“このキリスト教暦を作るのに、各時代が貢献して来た。それは多くの時代の働きによってなされた尊い芸術品である”と、スウェーデン・ルーテル教会の A.Nygren は、1948 年の監督就任に際してルンドの教区に与えた牧会書簡で述べました。しかし典礼暦を、ただ人間が作ったプログラムに過ぎないと考えてはなりません。実に神御自身がこの典礼暦を用いて、歴史の教会にキリストの福音を語ってくださって来たのです。

この典礼暦を貫いている支配的な観念が“福音の終末的使信”であることを、待降節第1主日の朗読配分は明確に示しています。A.Nygren は牧師の礼拝説教について言っています。“自分が勝手に選んだテキストによって説教する人は、何の苦もなく、毎日曜その好みに従って説教するようになります。典礼暦の順序に現れたテキストの選択によって説教する人は―― そして本当にテキストによって説教する人は――キリストに関する福音を説教します。” 事実、私たちがほとんど毎主日に、説教者が自分の好みに従って語る説教を聞かされて来たとしても、それでも特にカトリック教会では“ミサの朗読配分(Ordo)”に従って“ことばの典礼”での聖書朗読が行われていることは、何ものにも代えられない、感謝すべき信仰の遺産であります。「耳のある者は聞きなさい。」(マタ 11:15, 13:43)

“人の子の前に立つことができるように”、“身を起こして頭を上げなさい。” 私たちの新しい一年(主日C年)が始まりました。

2. Iテサ

キリスト教信仰に入る、あるいはキリスト教の信者になるということを、多くの現代人は使徒たちが伝えたのとはまるで違って理解しています。

しかし新約聖書によれば、洗礼を受けて信者になるとは、“わたしたちの主イエスが来られるとき、御前に立つことができる、聖なる者になる(新しく生まれる)こと”であって、この義化(カトリック教会のカテキズム 1987～1995)の業を神がその日までに成し遂げてくださると、使徒たちは確信していました(フィリ 1:6)。

私たちも今朝の第二朗読によって、使徒たちと共に祈るようにと招かれています。

v.13 「(わたしたちを)父なる神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるよう、アーメン。」

3. エシ

預言者エシヤにこの主の言葉が臨んだ時、彼はまだ獄舎に拘留されていました(32:1以下, 33:1)。ほとんど全くだれも、彼の預言に耳を傾けることも、この主の言葉の真意を理解することはありませんでした。将来の来るべきメシアは、公平と正義をもって神の国を治める(v.15)と語られたこの預言を、現代のほとんどの信者も正しくは理解していません。

この公平(ミシュパート)と正義(ツエデク)は、神の公平と正義であって、人間が作り出す民主主義と社会正義のことではないのです。人間がこれが理想の世界だと考えるものを、神も同じように共感し主張してくださるはずだと勝手に考えて、そのような理解で聖書の用語を解釈することが、しばしば行われて来ました。現在我が国では衆院選を前にして、各党が“実行可能な政策”ではなくてむしろ“耳触りの良い夢”を語ることに熱中しています。いつの時代どこの国でも、大衆は夢に酔わされることには弱く、ほんものの“神のことは”を聞き取ることには疎いのが常でした。

にもかかわらず神は聖書を通して、預言者エシヤを用い、使徒たちを用いて、教会に“神のことは”を語り続けておられます。今年も待降節第1主日を迎え私たちは、教会の典礼暦を用いて“キリストの福音の終末的使信”を語ってくださる神に感謝しましょう。司祭にせよ信者にせよ、もしだれかが“神のことは”を聞き取り、ほんとうに理解するなら、その人は公式(教導職の説教/ホミリア)にせよ私的(信者の教話/プレディカチオ)にせよ、“決して沈黙してはならない”(イザ62:6)。私たちキリスト者はすべて、将来その日には“玉座の前と小羊の前に立って”歓呼する御国の民なのでありますから(黙7:9-17)。

アーメン、ハレルヤ。

12月9日 待降節第2主日

バル 5:1～9 フィリ 1:4～11 ルカ 3:1～6

1. ルカ

vv.3-4 「神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」

教会とその信仰は“神のことば”に基礎を持っていて、これを神学的には“啓示”と呼びます。“神の啓示に関する教義憲章”は、この“神のことば”が“聖伝と聖書”によって教会に伝えられて来たことを述べています。私たちは聖伝と聖書によって、神のことばを聞いた使徒たちや預言者たちの証言に耳を傾けるのです。このような媒介なしに、だれかが“現代には現代の神のことばがある。自分はそれを聞いた”と主張するならば、それは異端であって、正統的なキリスト教信仰ではありません。教会は、神のことばを聞いた使徒たちや預言者たちの証言を、聖伝と聖書を通して与えられ、これを受け入れることの上に基礎を置いているのです。私たちがミサの中で信仰宣言を唱和するのは、この意味に他なりません。

洗礼者ヨハネに神の言葉が降ったとは、キリストの福音の出来事がここから始まったという意味で重要なのです(使 1:22, 10:37 参照)。それは“悔い改めの福音”であります。この悔い改めという言葉は、カトリック教会では“痛悔”の意味で理解されがちですが、聖書では元来“神に立ち帰る”という意味で使われて来ました(エレ 3:14,22 他)。“キリストによる罪の赦し”を得させるという目的で“悔い改めの洗礼”を宣べ伝える……、それが洗礼者ヨハネが証言している“神のことば”なのです。

そして、イザ 40:3-5 が引用されます。洗礼者ヨハネが、また使徒たちが宣べ伝えている“悔い改め”は、来たり給うキリストを再び迎える終末の日を目指していて、そのような終末的未来の展望が、待降節第2主日の主題になっています。このような展望が忘れられて、人々が今の時代のことだけに関心を向けている教会で、待降節の主日のミサの朗読配分は福音の終末的使信を今年も確かに語っている……、ということに私たちは驚きます。

「わたしは、…… 罪のゆるしをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。アーメン。」(信条)

2. フィリ

v.6 「キリスト・イエスの日までに、……」

v.10 「キリストの日に備えて、……」

“神がキリストによって世を御自分と和解させ”(II コリ 5:19)てくださった福音、私たちが“この御子において、その血によって贖われ、罪を赦された”(エフェ 1:7)という救いが、教会に与えたこのような終末的未来の展望を、この第二朗読は証言しています。私たちはそのような聖書の証言を通して、神のことばを聞き

ているのです。「教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせる」(エフェ5:26-27)という“善い業を始められた”神が、“キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださる”(v.6)ということに、現代の教会はしっかりと目を向け、大いに期待すべきなのです。

神のことばの確かさは、神の確かさであって、それは人間の不信仰や疑惑や絶望によってもいささかも揺らぐことはありません。人間には絶えず繰り返し、悔い改めて信じることだけが残されている、そのような神の確かさなのです。「背信の子らよ、立ち帰れ。わたしは背いたお前たちをいやす。」(エレ3:22) 待降節の典礼での伝統的な祭服の色は、悔い改めを表す紫です。

3. バル

v.5 「エルサレムよ、…… お前の子らは、神が覚えていてくださったことを喜び、西からも東からも、聖なる者の言葉によって集められる。」

私たちキリスト者は、このような希望によって救われているのです(ロマ8:24)。かつて来られた方は、今おられ、そしてやがて来られる方と同じキリストです。教会は、今年も“神の子の第一の来臨を追憶する降誕の祭典”のために準備すると同時に、“終末におけるキリストの第二の来臨”の待望へと心向けます。この二つの理由から、待降節は愛と喜びに包まれた“待望の時”なのです。

アーメン、ハレルヤ。

12月16日 待降節第3主日

ゼファ 3:14~17 フィリ 4:4~7 ルカ 3:10~18

1. ルカ

v.18 「ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。」

教会が福音を宣べ伝えるというとき、それは来るべき裁きへの恐れを語ることと固く結びついています。私たちの主イエスは救い主であると同時に、裁き主であるということが語られないと、福音はただのおとぎ話になってしまいます。待降節の朗読配分は、メリークリスマスの浮かれた気分で聞き流されてはなりません。教会がその第一の来臨を追憶し、第二の来臨の待望へと心を向けるキリストは、「そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる」(v.17)裁き主だからです。

神の子イエスは、「わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるため」(1ペト 2:24)に、“聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となられ”(信条)、「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。」(1ペト 2:24) 私たちキリスト者は、洗礼によってキリストと共に十字架につけられ、新たに生まれました(ヨハ 3:3、II コリ 5:17)。そのことによってキリストは、私たちを最早裁きとは縁のない安全圏に移してくださったと、決して早合点してはなりません。そうではなくて実際は、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ 3:23)

教会は、水で“父と子と聖霊の名によって洗礼を授け”ますが、実にキリスト御自身が受洗者に「聖霊と火で」(v.16)洗礼を授けてくださったことを、私たちは信じているのです。「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(I テサ 1:10) 全世界がその第二の来臨を待ち望んでいる“主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。”(信条) 洗礼者ヨハネは、この福音の最初の証人でありました。

2. フィリ

v.5 「主はすぐ近くにおられます。」

口語訳聖書では「主は近い」と直訳されていたこの言葉(ὁ κύριος ἐγγύς)を、フランシスコ会訳は「主はもうすぐ来られます」と、初代教会の理解により忠実な形の日本語に置き換えました。この文章をそのように理解することが、あまりにも稀になってしまっていた現代の教会の人々に、この翻訳が正しい信仰の覚醒の助けとなることを切に願わないではられません。

「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」(3:21)という“待望の信仰”があればこそ、「地上の幕屋にあって苦し

みもだえている」(II コリ 5:2) 私たち「罪人を救うために世に来られた」(I テモ 1:15) 神の子キリストを“喜ぶ”ことができるのであり、降誕祭は“大きな喜び”(ルカ 2:10)の祭りとなるのです。

昔から人々は、“イエスは実在の歴史上の人物であったのか”、“イエスの処女降誕は事実か”、“イエスの復活は本当に起こったのか”などという議論を繰り返して来ました。しかし、それらのことが科学的に証明されたところで、それで人々が救われることにはなりません。福音が語る救いは、「初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17) 「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ 3:25) 「実に神は、割礼のある者(ユダヤ人)を信仰のゆえに義とし、割礼のない者(異邦人)をも信仰によって義としてくださるのです。」(ロマ 3:30)

“信仰などという難しいことは脇に置いて、みんなが喜ぶ楽しいクリスマスを祝いましょう”などと言うのは、ただの無意味な空騒ぎにしか過ぎないことを理解しましょう。

3. ゼファ

v.15 「イスラエルの王なる主はお前の中におられる。お前はもはや、災いを恐れることはない。」

“災いを恐れることはない”とは、決して終末の裁きが“無期延期になった”ということではありません。そうではなくて、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)キリストが、今や「王の王、主の主」(黙 17:14, 19:16)になられたということなのです。

キリストが死に勝利されたということが、私たち人間が肉体の死を回避出来るようになったことを意味しないように、私たちが終末の裁きを素通りして逃れることが出来るかのように、救いを考えるのは間違っています(マタ 12:36-37、I ペト 4:5)。そうではなくて、「そのとき、あなたは畏れつつも喜びに輝き、おのきつつも心は晴れやかになる」(イザ 60:5)ということが起こるのです。

「しかし、わたしたちの本国は天にあり、そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ 3:20) 「アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙 22:20) ハレルヤ。

12月23日 待降節第4主日

ミカ 5:1～4a ヘブ 10:5～10 ルカ 1:39～45

1. ルカ

v.42 「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」

アヴェ・マリアの祈りで、カトリックの信者には特別によく知られているこの言葉が、降誕祭直前の主日のミサで朗読される意味を考えてみましょう。

マリアは救い主を身ごもり、エリサベトの胎内には“預言者として主に先立って行き、道を整える”ヨハネ(1:76)がいて、“今や必ず実現する”(v.45)神の子の第一の来臨を共に賛美していました。もちろんエリサベトと胎内のヨハネも祝福されていましたが、マリアの受けた祝福はさらに勝っていました。その祝福は神からのものであって、人の誇り(ロマ3:27)とは無縁なものであったことに注目しましょう。「誇る者は主を誇れ」(I コリ1:31)と書いてあるとおりです。

昨年の6月に、現在の“アヴェ・マリアの祈り”が公式に使われるようになるまではかなり長期に亘って、“聖母マリアへの祈り”が唱えられていました。より古い“天使祝詞”からかなり大胆に訳し変えられた「主はあなたを……祝福されました」という表現に、特に老年の信者たちから非難が集中していたことが思い出されます。なんと愚かで無知な抗議であったことかと、嘆かないではいられません。

マリアへの祝福は、エリサベトとヨハネへの祝福にはるかに勝っていました。しかし、洗礼の秘跡により救いに入れられた私たちへの祝福についても、“神の国で最も小さい者でも、洗礼者ヨハネよりは偉大である”(7:28)とされています。“マリアは教会の卓越した全く独特な成員”、“教会の象型”であって(教会憲章53)、私たちと“共に主の祝福の中にある幸いな者”(v.45, 1:48)なのです。教会はこの“神からの祝福”の中で、神の子のかつての降誕を追憶し、さらに終末におけるキリストの第二の来臨を“身を起こし頭を上げて”(21:28)待望しているのです。

2. ヘブ

v.10 「この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」

教会がその第一の来臨を追憶する主キリストは、既に私たちのために「永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12)方、その第二の来臨の日に「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」(フィリ3:21)救い主であることを、私たちは信じるようにと招かれています。待降節だけでなく典礼暦の一年を通じて、そして特にこれから始まる降誕節に、いつもキリストの福音の終末的使信を聞き取ることが決して欠けることのないようにと、カトリック教会の主日のミサの朗読配分や公式祈願が整えられて来たことを感謝しましょう。

今朝の集会祈願(各年共通用)は、次のようになっています。「…… みことばが人となられたことを信仰によって知ったわたしたちが、御子の苦しみと死を通して復活の栄光にあずかることができますように。」試用版の公式祈願とは、その前提となっている神学が明らかに違う(!)ことを、ここで指摘しておきたいと思います。

3. ミカ

v.1 「エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのためにイスラエルを治める者が出る。」

今日ベツレヘムはあまりにもよく知られているので、それがユダの地で小さな片田舎の町にしか過ぎないことを、私たちは見落としがちです。しかしそれは、神がこの町を特別に救済史の御業のために用いられたために、聖書の中で有名になったからでありました。預言者ミカが語っているように、それはイスラエルとユダの王ダビデの誕生の町でありました。私たちの主イエスは、ダビデの子孫として(!)この町で誕生されました(ルカ2:1-7、ロマ1:3)。

現代では、そこに世界遺産に登録された聖誕教会が建っていて、ローマ・カトリック(フランシスコ会)、東方正教会、アルメニア使徒教会が区分所有していることが、よく知られています。

しかし本当に大切なことは、そこから歴史の中に誕生された神の国の「王の王、主の主」(黙17:14, 19:16)は「わたしのためにイスラエルを治める者」、すなわち「神がお遣わしになった者」(ヨハ6:29)であったということです。

v.3 「彼は立って、群れを養う。…… 今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶからだ。」

私たちの救い主イエス・キリストは、「天と地の一切の権能を授かって」(マタ28:18)、「わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償う」(ヨハ2:2)弁護者として、私たちのために執り成してくださっているのです(ロマ8:34)。「アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙22:20) ハレルヤ。

12月25日 主の降誕／日中のミサ

イザ 52:7～10 ヘブ 1:1～6 ヨハ 1:1～18

1. ヘブ

v.3 「御子は、……人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」

日中のミサの朗読配分では、イザヤ書においてもヘブライ人への手紙でも、王の即位の主題が背景になっています。教会の主である御子キリストはまた、目には見えないが現在宇宙の支配者であって、天と地の一切の権能を授かっており(マタ 28:18)、あらゆる支配と権威に勝利し(コロ 2:15)、彼の足の下にすべてものは置かれており(エフェ 1:20-22)、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます(信条)。

このキリストはおとぎ話の主人公ではなくて、私たちの歴史の中に実際に来られたという確かな事実を、教会は降誕節に記念し、祝い、宣教するのです。このような宇宙的な王として即位されたキリストは、私たちの時代には聖書が証言しているようには教会で説教されて来ませんでした。しかしそれにもかかわらず、私たちの共にささげるミサで、神のことは確かに聖書朗読そのものによって会衆に語られて来たのです。

もし、私たちに御国を受け継がせてくださる王であり、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られるキリストが、信者の第一の関心事でないなら、教会にとってクリスマスはそれほど大切な祭りではあり得ないこととなります。しかし、カトリック教会には“典礼暦”と“主日のミサの朗読配分”があることを、私たちは大いに感謝しましょう。御聖堂の中で聖書朗読台は、祭壇と並んで、重要な“ミサの二つの中心”なのです(ミサ典礼書の総則 8)。

2. イザ

v.7 「彼は……あなたの神は王となられた、とシオンに向かって呼ばれる。」

v.10 「主は聖なる御腕の力を、国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人がわたしたちの神の救いを仰ぐ。」

詩編の中には“即位の歌”と呼ばれるものがあって、主が王となって支配されることを主題にしています(47, 93, 95-100)。その中でも詩 98 がイザ 40:1-10 と共に、今朝の朗読部分の下敷きになっています。第二イザヤはここで、終末的なメシア到来の期待を美しく歌い上げていて、その期待を主の降誕の祭日の日中のミサで聞くようにと、現在の朗読配分を作り上げるに至ったカトリック教会の伝統に、深い敬意を覚えないではられません。

この期待のメシア、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られる主は、教会が降誕節にその第一の来臨を追憶して祝っている神の子キリストです。この方は私たちの罪のために死に渡され、三日目に復活して、神の右の座にお着きになりました。全世界の教会の希望であるキリストの、第二の来臨を迎える大群

衆(黙7:9)の中に、おお主よ、私たちも加えられますように。

Oh, when the saints go marching in Oh, when the saints go marching in
Lord, how I want to be in that number When the saints go marching in !

3. ヨハ

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

歴史の教会は、「人間の姿で現れ」(フィリ2:7)、「すべての人の贖いとして御自身を献げられた」(Iテモ2:5)「わたしたちの主イエス・キリスト」(ロマ1:4)を「見た」(Iコリ9:1)証人たち(使1:8,22)の証しの上に立って来ました。今からちょうど80年前にカール・バルトが述べたように、“われわれに出来るのは、ただ啓示の証しに基づいて、啓示を与えられ、受け入れ、承認することだけである。この啓示の証しが教会を造り、保ち、この啓示の証しにおいて、啓示はそれ自らの力と確実性と権威とをもって、われわれのもとに来る”ことを、現代のカトリック教会は喜びをもって宣言しています(神の啓示に関する教義憲章1, 7, 10)。

聖書を通して私たちに語っておられるのが“神御自身”であることを、残念なことに現代の多くの信者たちが見失って、どちらかと言うと、これをただの“人間に変化と改良を与える善い教え”のように考えて来たというのが、今日の教会の実状です。しかし、ミサが“ことばの典礼”と“感謝の典礼”によって、神御自身が私たちに会ってくださる恵みの座(ヘブ4:16)であることを、21世紀の教会は再発見しなければなりません。

私たちは今朝、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」という使徒たちと原始教会の証しによって、真実であり(Iテモ1:15)、ただ一度成し遂げられた(ヘブ8:27, 9:12)啓示を受け入れ、信じて命を得るようにと(20:31)招かれています。

今年も全世界で、聖書朗読台と祭壇を囲んで共にミサをささげているキリスト者一同が、父と子と聖霊の御名によって、“恵みの上に、更に恵みを受ける”(v.16)降誕節でありますように。

アーメン、ハレルヤ。

12月30日 聖家族

サム上 1:20～28 Iヨハ 3:1-2,21-24 ルカ 2:41～52

1. Iヨハ

v.23 「その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです。」

私たちキリスト者にとって、「互いに愛し合う」という一致と結束は、“キリストの祭壇を囲んでのこと”であります。初代教会と教父たちの伝承は“キリストが祭壇である”と宣言していると、ピエール・シュネルは書きました(ミサきのうきょう p.78-79)。キリストの祭壇を囲んで共にミサをささげている教会は、キリストの福音を共有している共同体なのです。ミサにおいては、キリスト御自身が御言葉を語り、信じる者に罪の赦しと永遠の命を与えてくださいます。

典礼憲章は、キリストが御自分の死と復活の記念を託されたミサが、司式司祭から信者への一方通行ではなくて、信者が“この秘義をよく理解し、聖なる行為に、意識的に、敬虔に、また行動的に参加する”ものとなるように、強く勧めています(11,14,48)。

ところが私たちの経験から言うと、毎主日のミサはそれほど明確には“キリストの福音を共有している”という実感に乏しく、聖書朗読台が“神のことばの食卓の富を豊かに与える”役割を本当に果たしているか、疑問に感じることも多いのです。ですからいつの時代にも、あるがままの教会とそのミサを否定して、自分たちの理想とする別の教会や宗教を新しく作ろうと考える革命家たちがいました。

しかし、私たちはこの現状を否定したり、それに目をつむる必要はありません。なぜなら、そのような混沌と闇(創 1:2)のただ中でこそ、神の御業は人間のあらゆる不信仰や罪の現実にもかかわらず、「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る」(I コリ 15:57)日に向かって、進められているからです(黙 6:2, 19:11-16, 22:12-13)。どんなに不完全であっても、“それでもここに教会がある、それでもここにミサがある”ことは、神の豊かな慈愛と寛容と忍耐(ロマ 2:4)によることなのです。私たちは、“目に見えるものによらず、信仰によって歩む”(II コリ 5:7)ことを学ぼうではありませんか。

2. ルカ

v.49 「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」

人は神の御業をいつもはっきりと知っているわけではありません。神の子が受肉して聖家族の中にいるのに、両親はそのことを全く理解せず、イエスのこの言葉の意味さえも分からなかったという話を、なぜルカは彼の福音書に書き加えたのでしょうか。

それは、両親の不信仰を責めるためではありませんでした。そうではなくて、神の御業は決して否定出

来ない確かさをもって始まっていたのだと、証言するためでありました。王となるためにエルサレムに上り(ルカ19:38)、十字架に掛かって御自身をきずのないけにえとして献げられたキリストは、このとき「神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりして」(v.46)、そこに来ておられたという確かな事実を、私たちが信じるためでありました。

福音は、ただ一度(ヘブ7:27, 9:12)成し遂げられた神の御業を語るものであって、私たちはこれをミサにおいて聞き、信じ、受け入れるのです。人間にとってそれが明白ではなく、聞き取ることも理解することも出来ないということがあるとしても、それでも福音のキリストは私たちのミサに来ておられ、ただ絶えず繰り返し、私たちが信じて受け入れることを求めてくださっています。聖家族は現代の教会にとって、すぐに理解出来なくても「心に納めて」(v.51)待つことの模範として、与えられているのです。

いろいろな福音がたくさんあるのではなくて、使徒たちが伝えたただ一つの福音だけがあるのです。ですから私たちはミサから離れて別なところに行き、もう一つの福音を見つけ出すということは出来ません。両親がイエスを見つけることが出来た唯一の場所は、やはり神殿以外には存在しませんでした。

3. サム上

v.27 「わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。」

大切なことは、母ハンナの、そして彼ら夫婦にとっての信仰でありました。預言者サムエルの両親の物語りが、ここには伝えられています。恐らく福音書記者ルカはこの物語りを下敷きにして、聖家族と少年イエスの物語りを書きました。

現代では日本中のほとんどの親たちが、自分の子供の教育にたいへん熱心で、塾通いや各種の習い事のために本人よりもむしろ親が夢中になっています。その全部が無駄であるわけではありませんが、大部分の親は“教育を受けさせさえすれば、トンビが鷹になる”と勘違いしていたことに、後になって気づくことになります。同じように教会でも、多くの親が自分の子供を幼いうちは日曜学校(カテケージス)に出席させただけでも、間もなく学校のクラブ活動や習い事の方に行ってしまうと、ミサには来ない大人に成長してしまったという経験をしています。

それでも、自分が信仰の上で“トンビ”でしかなかったことに気づいて、悔い改めて福音を信じる(マコ1:15)ようになるなら、そのような年老いた親は新しい一歩を踏み出したことになります。しかし、それを時代のせいにしたたり、子供たちの不信仰を非難するだけで、自分が回心して福音を聞く者になろうと努力することのない人たちが多いのです。あなた自身にとって信仰とは、いかほどのものですか。

エルカナとハンナの場合はどうだったでしょう。マリヤとヨセフはどんな親だったでしょう。私たちが、“神が聖家族を模範として与えてくださった”と感謝出来る、そのような者に造りかえられますように。

アーメン、ハレルヤ。